

『日本アジア研究』第10号(2013年3月)

## 急激な社会変動に翻弄される中国朝鮮族 ——韓国出稼ぎ経験のある農民夫婦からの聞き取り——

金銀実\*

1949年の中国共産党による「民族識別工作」によって、中国の少数民族として認定された朝鮮族は、政治的・イデオロギー的問題から43年もの長きにわたって韓国と往来がなかった。その間韓国は1986年ソウル・アジア競技大会と1988年ソウル・オリンピック大会を機に高い経済成長を成し遂げた。両大会には当時国交のなかった中国選手が参加したことで両国関係が強化され、中国でも大会の様子がテレビ放映されるようになった。そのテレビ映像は中国朝鮮族に経済成長を成し遂げた豊かな国・韓国の存在をはじめて認識させると同時に、韓国に対するあこがれの気持も植え付けた。そのような背景のもとで1992年に中韓国交が樹立されると、多くの朝鮮族が「コリアン・ドリーム」の夢を抱いて韓国へ流れ込んだ。中国が現在、世界第2の経済大国に成長しても、農村と都市の格差が依然として大きい以上、その移動は今後も続くだろう。

私が聞き取りをおこなった朝鮮族夫婦、崔景晃と李玉蓮（いずれも仮名）は、ふたりとも北朝鮮にルーツをもち、祖父の代に中国の東北部へ渡って来た。ふたりは中国で朝鮮族として生まれ育ち、中国の歴史的な出来事を次々と経験する。17歳のときに文化大革命を経験した崔景晃は、勉学の機会を失い、多くの衝撃的な出来事を目の当たりにしているうちに「これはどうも間違った革命かもしれない」と思いながらも、かかわらないという手段で自分を守る。文革が終わってからは両親を手伝って農作業をする。李玉蓮と結婚してからもずっと農業を営んだが、村に発電所が建設され操業を開始したのをきっかけに、その従業員たちを相手に豆腐商売を始め、金銭的にゆとりをもつようになった。しかし、2001年の発電所の操業停止により、収入源を失うことになり、韓国への出稼ぎを決め、2003年に研修ビザで韓国へ入国する。韓国で仕事に怪我をするなどアクシデントはあったものの、夫妻は6年間出稼ぎ生活を経て、延辺の都市部で家を買えるぐらいのお金を手にして、2009年に中国に戻った。延辺で家を購入して悠々自適の生活ができるはずだったが、「延辺より北京で家を買ったほうが将来的には儲かる」という娘の助言を受け入れて、北京で高額のマンションを購入した結果、今日の中国社会で広がっている「房奴」（住宅ローン地獄）に陥ってしまったのが、夫妻とその娘の現状である。——夫妻は中国社会の急激な変化に必死に適応しようとしてきたものの、結果的には、その変化に振り回されてしまったのだ。

朝鮮族の人びとの移動にかける思い、急激に変わる社会環境、それを生き抜く朝鮮族の人たちの逞しさと弱さが織り交ざったライフストーリーは、今を生きる朝鮮族の姿をリアルに描いているのではないかと思われる。

\* キム・ウンシル、埼玉大学大学院文化科学研究科博士後期課程2年、社会学。

## 1 はじめに

私は2012年3月中国に帰国中，1回韓国への出稼ぎを経験し，聞き取り時点でもう1回韓国へ行こうとしている50代半ばの朝鮮族夫婦，崔景晃と李玉蓮（いずれも仮名）から聞き取りをおこなうことにした。

この夫妻を聞き取り相手として選んだのは，第1に，夫妻が私と同じ故郷であるということだ。私の故郷は中国吉林省安図県の愉樹川（ユスツチョン）である。愉樹川には発電所があったおかげで，村とは思えないぐらい栄えていた。しかし，発電所の操業停止で，私の家族を含めて，多くの家族が村を離れるようになった。崔景晃夫妻もその中の1人であった。しかし，私はその時，まだ16歳だったので，村全体の状況については全然把握していなかった。その当時の私は，両親が村を離れたので，付いて離れただけだった。だから，現在は50戸90人ぐらしか残っていない私の故郷が一体いつから，なぜ，そこまで人が減ったのか，その時代を生きてきた夫妻に実情を聞いてみたかった。第2に，夫妻の娘は私の小，中学校のクラスメートでもあるため，以前からよく知っている仲だった。そのため，聞き取りを頼みやすかった。第3に，個人的な理由として，北京でアパートまでもっているクラスメートの両親が，なぜまた韓国へ行こうとするのか理解できなかったことである。正直，私の年にして，北京で自分のアパートをもっている人は，だれもいない。だから，クラスメートは私たちみんなのあこがれの対象でもあった。そんな彼女から「私のお母さんがまた，韓国へ出稼ぎに行こうと考えている」という話を聞いたとき，私は少しびっくりした。「なぜ？」「それぐらい稼いだら，もうゆっくり老後を過ごしてもいいのに……」「北京が気に入らないのかな」「韓国で暮らしたほうが中国で暮らすよりいいのかな」などと自分なりに答えを見つけようともしたが，それと思える答えが見つからなかった。

以上の3点が理由で私は，崔景晃夫妻に聞き取りをお願いすることにした。以下はその聞き取り内容をまとめたものである。

## 2 崔景晃夫妻のライフストーリー

### 一度の見合いで結婚

崔景晃は1950年生まれ。2012年3月の聞き取り時点で62歳。李玉蓮は1955年生まれ，聞き取り時点で57歳。崔景晃は吉林省安図県石門鎮愉樹川という村で生まれ育ち，李玉蓮は愉樹川からすこし離れた開山鈍という村で生まれ育った。23歳のときに親戚から崔景晃を紹介してもらい，写真でお互いの顔を確認したあと，1回見合いをただけで結婚が決まったという。

《李玉蓮》私たちの時代には，18歳になると娘を嫁にだすのが一般的でした。子どもが多い家は特にそうでした。男の子は別として，女の子は大した働き手にもならないから早く嫁に出したほうが得だというような社会的雰囲気がありました。私の従姉妹は13歳で嫁に行きました。食べていだけで大変な時代でしたから，親も仕方なかったでしょう。

うちは4人姉妹で、私は3番目です。父は私が7つのときに亡くなり、母が女手一つで私たち4人姉妹を育てました。だから、母の負担を少しでも減らしたいと言って、姉は2人とも18歳で嫁に行きました。うちの父は日本による強制連行を避けて自ら中国に渡ったと聞きました。母も10歳のときに両親に連れられて中国に来たそうですが、父と母は出身地が同じ平安南道だったという縁で一緒になったそうです。

私は、23歳のとき、親戚のひとから「真面目で勤勉な男がいるんだけど、どう？」と言われ、ふっと、「私も結婚しないといけないのかな」と口にしたら、母が私の写真をその親戚のひとに渡しました。写真といっても、当時は貧しかったので、1人で撮った写真なんかなかったです。姉妹と一緒に撮ったモノクロの写真があったので、その写真の私の顔に丸を付けて渡したんです。そうしたら、イナグネ（夫）から会ってみたいとの話がきましたので、会うことになりました。でも、結婚後に聞いた話ですが、じつは、夫は私より私の2番目の姉がもっと気に入ったんだそうです。2番目の姉は私たち姉妹の中でも一番きれいで、身長も一番高いです。でも、姉はすでに「工人」の人と結婚をしていました（笑）。

私と夫は顔を合わせたといっても、ろくに話もしてないです。一番上の姉と一緒に去了したので、姉が夫にいろいろ質問をして、私はただ隣で聞いていました。夫は長男で、弟4人と妹2人がいるという話を聞いて、私は嫌だなと思いましたが、姉が勝手に「きょうだいが多くて、嫁に行ったら苦勞しそうだけど、本人が正直で真面目そうだから、いいんじゃない」と言って、結婚を決めてしまったんです。夫はそのとき、弟と2人で来ていましたが、私の姉のパワーに圧倒されて、あまり話もしませんでした（笑）。だから、いまでいうデートなんかありませんよ。ふたりはろくに話もしてないですから。

### 結婚式には古着のチョゴリを着て

現代の朝鮮族の若者は、結婚式で朝鮮族固有の伝統より西欧の文化を受け入れ、チマチョゴリよりウェディングドレスを、実家よりきれいな砂浜で親友などに囲まれながらロマンチックな結婚式を挙げるのを好む傾向がある。豪華さを競い合う現代の「ハデ婚」とは違って、ふたりの結婚式はじつに地味なものだったらしく、李玉蓮はチマチョゴリを着用できただけで満足したと話している。生活に余裕をもつことが困難な時代であったが、朝鮮族固有の伝統的な儀式はできるだけ守ろうとしたことが窺えた。

《李玉蓮》結婚式の当日、私は、夫の弟が買ってくれた古着のチマチョゴリを着用しました。私の姉が結婚したときは、ちょうど文化大革命期だったので、チョゴリも着られませんでした。それに比べると私は幸せなほうでした。新品のチマチョゴリではなかったですが、チマチョゴリが着られるだけで満足でした。

結婚の日は、私が住んでいた村で簡単に結婚式をおこない、私は両親にクンジョル<sup>1</sup>をして、そのあと、牛車に乗って夫の家まで行きました。新

<sup>1</sup> クンジョルとは、結婚に際して、両親に対しておこなうお辞儀で、両手を床につけ、

郎の家が近ければ歩いて行くのですが、少し距離がありましたので。夫の家に到着してすぐ甘い水を柄杓から飲みました。柄杓に入った水を飲むのは、新郎の家に早く慣れるためだとか、口を慎むためだとか言われていましたが、確かなことはわかりません。たくさんのご馳走が用意されていたわけではありませんが、棗（なつめ）<sup>2</sup>とゆで卵<sup>3</sup>と麵を少しずつ食べたことを覚えています。夫の両親にクンジョルをし、その日の夜は村の人や夫の友人と宴会をしました。でも、私も夫も知人があまりいなかったのも、全体的にこじんまりとした結婚式になりました。翌日は、私が持参した米とマッチを用いてご飯を炊き、お舅さんにクンジョルをしてから食事をしました。そのとき、お金はもらえませんでした。それに、3日目になっても実家に戻りませんでした<sup>4</sup>。なぜなら、夫の家にはまだ小さい妹がいて、お姑さんが仕事に出ると、家事をする女手が必要だったので、私は実家に帰れなかったのです。たしか、結婚式の1ヵ月後にやっと実家に戻ったと思います。

### 文革の嵐のなかの青春時代

崔景晃は7人きょうだいの長男として、14歳のときから山へ行って木材や石を運ぶ仕事をして、お金を稼いだ。そして、彼は自分の青春時代は文化大革命と一緒に終わってしまったと嘆いた。

《崔景晃》私の父は慈江道（チャガンド）出身で、生まれてすぐ両親と中国に渡ったと聞きました。母は7～8歳頃にマンポというところから中国にきたそうです。父の一家が最初中国で住み着いたのが当時の間島、いまの延辺で、母の一家が最初住み着いたのはいまの集安のあたりだったそうです。しかし、母方のおじいさんは、朝鮮人がたくさんいるところへ行こうと言って、家族を連れて間島地域に移住したそうです。その後、父の家族も母の家族もそれぞれ間島で共産党の土地改革によって土地を分配され本格的に農業をするようになったそうです。それで、父の一家が定着をしたのが今の楡樹川一帯でした。そこで父は母と結婚をしたそうです。その後、中国の解放を迎え、朝鮮の解放も迎えたんですが、そのときはもう朝鮮に戻ることはあまり考えていなかったそうです。なぜなら、中国で土地を得たことで、生活がある程度安定したからです。でも、生活が安定したといっても、トウモロコシのご飯も腹いっぱい食べられない状態でしたけ

---

その後ゆっくりと頭を両手の上に乗せるようにしてお辞儀をする。新婦の両親にするお辞儀をジョルと呼び、新郎の両親にするお辞儀をクンジョルと呼ぶ。朝鮮語のクンは大きいという意味なので、ここにも男尊女卑の思想が窺える。しかし、李玉蓮は自分の両親にもクンジョルをしたと話した。

<sup>2</sup> 棗は子宝を意味しており、伝統的な食べ方は、新郎の母が新婦のチマの上に投げ、それを食べるのである。

<sup>3</sup> 聞き取りでは、ゆで卵も子宝を祈願して新郎新婦が半々に分けて食べるという説明だったが、延辺朝鮮族自治州博物館の展示の説明文では、夫婦間におけるさまざま苦労をふたりで分かち合うために半々に分けて食べる、とされている。

<sup>4</sup> 2日目に新郎新婦は新郎の両親にクンジョルをした後、新婦の実家に戻り、2～3日過ごした後、新郎の家に戻り新しい生活を始めるのが通例である。

ど……。私はそんななかで生まれましたので、いつもお腹をすかせてひもじい思いをしていました。当時は人民公社<sup>5</sup>の時代だったので、家族の人数によって食べ物が人民公社から配られるんです。私は9歳か10歳ぐらいのときから、配給日になると袋を持って、村の大人たちと一緒に人民公社の前で列に並んで食料の配給を心待ちにしていました。で、その日には白いお米にトウモロコシなどを混ぜたご飯が食べられたので、子どもながらにその日を楽しみにしていました。

14歳のときから私はうちの労働力として、山へ行って木材を運んだり石を運んだりする仕事をしました。そんな重い物を背中に背負って山を降りたら、足ががたがた震えるんです。そのせいで、いま猫背になっていると思います。そのときは学校といってもろくな授業がなかったです。毛沢東の思想を学ぶ以外には工場か農村に行って労働者や農民たちから学ぶという感じでしたから、いまのような知識を学んだ覚えはないです。

そして、私が17歳のとき、「紅衛兵」という人たちが村中を歩きまわって、「反動分子」を探していると言って、文化大革命が始まったのです。文化大革命のときには、一番安全な身分が「貧農」だったので、私のうちは何の被害も受けませんでした。最初に被害を受けたのは、村の「大地主」の人たちだったと思います。次から次へと全財産を荒らされ、迫害されましたね。毎週、私が通っていた中学校で「反動分子」の「批判大会」がおこなわれ、毎回大勢の人たちが集まりました。まず、校内に一列に並ばせて、腰を90度に折る平身低頭の姿勢で2時間以上も立たされるんです。それを「反省の時間」といい、途中で姿勢を崩した人がいれば、直ちに殴られる対象となります。もちろん、拳で殴るような生ぬるい殴り方はしないですよ。軍事訓練用の木刀や皮のベルトで殴るのです。それと同時に、いろいろ訊問をするんですが、よく投げかけられた訊問の1つが「おまえは毛主席を憎んでいるのか」というものでした。もちろん、最初は当然みんな「いいえ、憎んでなんかいません」と言うわけですが、そう答えると紅衛兵たちは直ちに「うそつけ！ おまえのような反動分子が毛主席を憎んでいないわけがないだろう。本当のことを言え！」と、一斉に殴りつけますので、みんなその痛みに耐えられなくて、最後は「はい、憎んでいます。ごめんなさい」と言ってしまいます。それがまた、一層の激しさで殴られる理由になります。「敬愛する毛主席を憎んでいる奴」を徹底的にやっつけるのが紅衛兵たちの仕事ですからね。

私は、場合によっては、見るに耐えられなくて、家に帰って布団をかぶって独りで別なことを考えたりしましたが、その光景が頭に焼きついてなかなか忘れられません。特に衝撃を受けたのが、友達のお父さんが小学校の先生をしていましたが、「反動分子」のレッテルを貼られ、みんなの前で批判されるようになりました。そのとき、私の友達、つまりその息子が、みんなの前で自分の父親を殴りながら、「反動分子の父親は要らない！ 縁を切る」と言ったんです。私はいくら紅衛兵たちによく思われ

<sup>5</sup> 人民公社とは、中華人民共和国における農業集団化の組織で、1958年に毛沢東の指導下に大躍進運動の開始とともに組織され、生産手段の公社所有制に基づく分配制度が実行された。

たくても、自分の父親にそんなことはできないと思って、もうショックでした。だから、文化大革命が頂点に達したときには、親戚同士、家族同士を問わず、紅衛兵に情報を提供している人たちがいました。たとえば、「うちの親戚のだれそれは昔朝鮮に行ったことがある。朝鮮のスパイにちがいない」「私の中学のときの先生は反動分子だった」など、何の根拠もないまま個人的な恨みを文化大革命にかこつけて晴らそうとした人たちも少なくなかったと思います。また、紅衛兵たちが迫害の対象となる人たちに対して残忍な肉体的リンチと精神的蹂躪を繰り返した結果、多くの人たちが「反動分子」のレッテルが貼られると自ら命を絶ってしまいました。私の中学のときの先生も紅衛兵たちの訊問に耐えられず、自ら首を吊って死んだのです。私はもう友達のあれを見ても、中学校の先生のあれを見ても、どうもこれはあまりいい革命ではないかもしれないと思うようになり、それからはいっさい関わらないようにしました。だから、最初は「批判大会」を見に行ったりしていましたが、後では「批判大会」がある日には家で布団をかぶって寝るようにしていました。それで両親に「若い者が革命の精神がなく昼から寝ている」と怒られたりもしましたが、「自分とは関係ない」と言い張りました。

文革は1966年に始まって1976年に終わりましたので、ちょうど10年続きました。文革が終わったら、私もいつの間にか26歳になっていたので、私の青春はまさに文革と一緒に終わってしまったという感じですね。

#### 生産責任制への移行と発電所の稼働

文化大革命は1977年の鄧小平復活によって終止符が打たれた。その後、鄧小平は「改革開放政策」の第一弾として、長年中止されていた大学入試を再開すると同時に、農村では人民公社制度を止め、生産責任制<sup>6</sup>を導入した。崔景晃は一家の大事な働き手だったため、学校教育が復活しても学校には戻らず、両親を手伝って農作業に専念することになる。

崔景晃は1978年に李玉蓮と結婚をしてからも、両親と6人の弟妹と一緒に生活をしながら農業を営んだ。その後、弟妹が次々に結婚をして独立し、夫妻のあいだにも子どもが生まれるなど生活に変化が起きた。農業も自給自足から自由市場で物が売れるようになり、農産物で収入を得るまでになった。また、1979年からは愉樹川で火力発電所が稼働するようになり、大勢の従業員たちが愉樹川に集まってきた。それをビジネスチャンスと捉え、夫妻は豆腐商売を始める。幸い、その商売が順調に進み、夫妻は村の中では有名な金持ちになった。

《崔景晃》農業が生産責任制に移行してから、みんな、家族の人数によって土地が与えられ、その土地を利用して個人で耕作して収穫をするようになりました。収穫物は一部を国に納めた後は自由に処分できますから、家族が食べる分だけを残して、残りはみんな売ろうとしました。愉樹川では、

---

<sup>6</sup> 中国語では「家庭联产承包责任制」といい、人民公社制度との一番の違いは、農民は政府から生産を請け負うが、一定量の農作物を国家に納めれば、残りの農産物は自由に処分でき、自由市場に農産物を販売することも可能になったということである。

中華人民共和国が成立してすぐ火力発電所の建設が始まりましたが、ちょうどできあがったら文化大革命が起きて、稼働ができない状態がずっと続きました。それが、文化大革命が終わった後の1979年になってやっと稼働し始め、それと同時に大量の従業員たちが愉樹川に集まってきました。最初は朝鮮族の従業員が多かったのですが、だんだん漢族の従業員が増えてきて、2001年に操業停止になる頃には漢族の従業員のほうが多かったです。多くの農民たちは農産物をその従業員たちに売ることによって収入を得ていました。

発電所の人たちの生活は豊かでした。給料以外にも、食用油、果物、魚、肉など、食べるものから日用品まで全部発電所から配られたんです。だから、その人たちは何不自由のない生活をしていたと思います。私たちが住んでいた村から歩いて40分ぐらい行くと、まず、発電所の従業員たちが住んでいる平屋の団地に着きます。そこからさらに行くと3階建ての団地に着き、さらに行くと5階建ての団地、もっと行って発電所に近づくと、8階建ての豪華なアパート団地が広がります。そこには発電所の幹部のひとたちが住んでいて、そこは当時の私たちからすればもう地上の楽園のような感じでした。

80年代90年代と時間が経てば経つほど、発電所の規模は拡大され、発電所に働く人たちの子どものための小学校、中学校も建設されました。学校以外にもプールや体育館などの施設、カラオケなどの娯楽施設もどんどん建設されました。でも、それらを私たち農民が利用するにはお金が必要でしたので、発電所側に対してはいろいろと不満が多かったです。1998年頃からは発電所の従業員たちが住んでいる団地から延辺の各主要都市に行く無料バスも運行されるようになりました。席が空いていれば私たちも乗ることができました。でも、チケットを買わないといけなかったです。あらゆるところで発電所の従業員と私たち農民は区別されていました。

また、発電所側は毎年旧正月になると、爆竹を鳴らしたり花火をあげたりしてお祭りムードを高めましたので、うちの子どもたちはそれを見るのが毎年の楽しみでした。それは、たぶんうちの子どものだけではなく、村の子どもすべての楽しみであったと思います。当時の農民たちにはお金の余裕がなかったので、子どもたちに爆竹を買ってやるなんてことはありえないことでした。興奮している子どもたちと違って、農民の大人たちは「何万元もお金をああやって燃やしてしまうぐらいなら、それを私たちの村に寄付してくれればいいのに」と遺憾の声ばかりあげていました。発電所の人たちは本当に贅沢な生活をしていましたが、発電所側は村の農民に対してはとてもケチでしたので、農民たちは発電所の人たちがあまり好きではなかったです。発電所で働いていた従業員たちも貧しい私たちを見下していたと思います。

でも、農民たちは発電所の人たちにいろいろ文句を言いながらも、その人たちを相手にあれこれと商売をしていました。発電所の中に立派な市場がありましたが、そこで商売をしているのは村でも少し余裕のある農民たちで、肉を売ったり野菜を売ったりしていました。市場の中にある売り場を借りるには、最初いくらかの契約金を支払い、その後も、稼ぎの何パーセントかを発電所側に払わないといけない仕組みだったので、少しお金の

ある人でないと売り場が借りられませんでした。だから多くの農民たちは、市場の中ではなく、外の道端で、従業員の人たちの退勤時間に合わせて、旬の野菜や果物を並べて売っていました。私の村だけではなく隣の村やもっと遠い村からも売りに来ている人がいましたので、競争は激しかったですが、よく売れました。

私たち夫婦も最初は主に農産物を中心に売っていましたが、1992年に大豆が豊作になり、売りさばけずに倉庫にいっぱい残ってしまいました。それで悩んでいるとき、息子が「豆腐でも作って売ったら」と言ったのがきっかけで、ふたりで「やってみようか」となり、やりました。昔はなんでも家で作って食べていました。当然、豆腐も家で作って食べていましたので、それをただ大量に作ればいいという感じでした。本当に息子の言葉に閃いて豆腐の商売を始めました。それが思ったより評判がよく、発電所が運転停止になるまで8年間ずっとしていました。妻が家で豆腐を作り、私が三輪車で発電所の人たちが住んでいる団地まで運んで売りました。最初は1日1回で30丁の豆腐を作っていましたが、あっという間に売りきれたので、次の年からは昼1回と夕方1回と1日2回やるようにしました。豆腐商売を始めてから子どもたちの教育費を払っても少し余裕ができるようになりました。

#### **発電所の操業停止／韓国への出稼ぎ増加**

崔景晃・李玉蓮夫妻は発電所の従業員たちを相手に豆腐の商売を始め、順調に収入を増やしてきたが、思いもよらないことが起きた。2000年に中央政府は環境汚染を減らすということで、数多くの火力発電所を廃止することにした。それで、2001年に楡樹川の火力発電所も操業停止になったのだ。農民たちは目の前の農産物購買者がいなくなったことで、収入が減り、出稼ぎを考える人が増えたという。

《崔景晃》発電所が運転停止になるという噂は1997年からありました。私たち夫婦は「まさかこんなに大きな発電所がなくなるものか」と半信半疑でしたが、1998年に発電所で一番偉い所長さんが琿春市の発電所に異動になったという話と同時に、従業員たちもそれぞれ自分たちの行き先を探すようになりました。そのような光景を目の当たりにして、私たちも「ああ、本当だったんだ」と目が覚めました。そのときは本当にやり切れない思いでいっぱいでした。他の農民たちもみんな悩んでいました。発電所側に不満ばかり言ってきた農民たちでしたが、発電所のおかげで収入を得ていたのも事実でしたので、感謝の気持ちがなかったわけではないと思います。だから、発電所が運転停止になるということに対して、従業員たちより私たち農民のほうがもっと悲しがっていたような気がします。従業員たちは楡樹川よりもっと大きな県や市の発電所に移る人もいましたので、逆に喜ぶ人もいました。従業員たちが自分の行き先探しに必死だったのに対して、私たちはため息ばかりついていました。

発電所が稼働していたときにはあまり村から外へ出稼ぎに行く人はいなかったと思います。もちろん、若い人たちは学校を卒業したら中国の都市部に出て行きましたが、それ以外の人たちが出稼ぎに行くことは

あまりなかったです。うちの村には150世帯ぐらいいましたが、発電所閉鎖前に韓国に出稼ぎに行ったのは10世帯もなかったです。その当時は韓国へ出稼ぎに行っている人たちはヒーロー扱いでした。また当時は、韓国や日本に出稼ぎに行く人というのは、農民より発電所の従業員のほうが多かったような気がします。私は8年間豆腐商売をしていましたので、発電所で働いている朝鮮族の人たちなら、だいたい顔を知っていました。で、たまたま豆腐を買いにきた人と立ち話をしたりすると、「うちの隣のだれだれが発電所の仕事を辞めて、韓国へ出稼ぎに行った」と話してくれました。また、うちの息子のクラスに、発電所の従業員の子どもでしたが、お母さんが日本に出稼ぎに行って、日本のゲーム機を送ってもらったらしく、それを学校に持ってきた子がいたそうです。それで、うちの息子を含め、多くの子どもたちがそれにあこがれ、自分の親に「自分もああいうゲーム機がほしい」と甘えて、その対処に困った私たち何人かの保護者が、学校に問題提起をしたのです。そうしたら、学校側で親が外国に行っている家庭を調査した結果、発電所側の保護者だけを集めて会議を開いて、学校に外国製の高級な学用品やゲーム機などは持ってこさせないようにしました。それって、発電所の人たちのほうに外国へ行っているケースが多かったという証拠でしょう。

当時、韓国へ行こうとすると、手数料が法外にかかりました。少なくとも10万元（150万円）はかかりました。下手をすると20万元（300万円）もかかりましたから、農民じゃあ行きたくても行く気にはなれませんでした。20万元なんかあっちこっちで借りようとしても借りられません。当時、うちの村の全員から借りても20万元は集まらなかっただろうと思います。一方で、発電所の人たちは、自分も周りの人も結構お金がありましたので、少し無理すれば行けたわけです。発電所でもらう給料は愉樹川で食べていくには何の問題もなかったと思いますが、韓国での給料に比べるとやっぱり天と地の差です。たぶん発電所の1年分の給料が韓国での1カ月の給料より少なかったんじゃないでしょうか。人間の欲望は尽きるところを知らないです。私たちから見れば、発電所で働くのは天国で働くような感じでしたが、本人たちからすれば満足できるものではなかったのですね。はっきりした人数はわかりませんが、発電所が運転停止になってから、他の発電所に移る人は移り、発電所勤務を諦めて中国の都市部に行く人は都市部に行き、また、韓国に行く人は韓国に行ったと聞きました。

私たち夫婦は発電所の人たちが全員いなくなってから、何をしたらいいかわからないまま、それでも2年間は農業を続けました。でも、私たちの村だけではなく他の村も含めて、愉樹川全体が活気を失いました。学校もない、病院もない、市場もない、人もいない。そういうなかで正直、何をしても元気が出ませんでした。農産物の購買者もいなくなりましたので、農民たちの収入もなくなったわけです。そんな状況のなかで、知り合いは次々と村を離れて中国の都市部に行きました。また、韓国へ行く人も1人、2人と現れ始めました。私たちもそんななかで村を離れることを考えないといけませんでした。大学に通っている息子と娘がいたので、そのままずっと村で農業をしているわけにはいきませんでした。子どもたちの将来のためにも、私たちの将来のためにも、村を出てお金を稼がないと

いけなかった。とすれば、中国の都市部に出稼ぎに行くか、韓国に行くか、選択肢は2つに1つしかなかったです。でも、中国の都市部に行ったとしても、中国語があまり上手ではないし、年も若くない私に仕事が見つかるのか不安でした。かりに仕事があっても、給料はそんなによくはないと思いました。だから、お金がかかっても韓国に行ったほうが良いと判断し、手続きをすることにしました。

私は発電所がなくなって1年半ぐらいした時点で手続きを始めましたので、早いほうだったと思います。たしか1992年か1993年に村ではじめて韓国に出稼ぎに行った人たちのグループがいましたが、みんな大金持ちになって帰ってきましたから、韓国に行けばお金が稼げるという希望がありました。私が手続きをしていた当時は、みんな「このまま村にいることはできない」「中国の都市部に行くか韓国に行くかなんとかしないと」という感じの人が多かったですが、実際に動き出した人はまだ少なかったです。ですが、2、3年後には半分以上が村を離れました。

私は、豆腐商売で稼いだお金と親戚から借りたお金8万円をブローカーに支払い、韓国行きのビザを申請しました。それで、3ヵ月後に韓国の研修ビザを手に入れました。正直、手数料を渡したその日から本当に毎日心配でよく眠れませんでした。当時は、手数料をそのまま騙し取られて、自殺に追い込まれた人など珍しい時代ではなかったからです。私は本当に運がよかったです。8万円の手数料といえば当時としてはそんなに高い手数料ではなかったですが、それだけの手数料で、しかも3ヵ月という短い時間でビザがもらえました。韓国ビザを手にしたら、興奮してまた寝られませんでした。

私は今回帰国した際に、久しぶりに愉樹川行ってみた。私が生まれ育った愉樹川は山もありきれいな川もある緑豊かな田園風景がある半面、アパートが建ち並び、体育館、映画館、プールなどの都会的な建物もある、田舎ながら都会的な雰囲気が漂う素敵なところだった。夜になるときれいにライトアップされた市民公園で家族連れの人たちがバドミントンをしたり散歩したりしていた。また、中央広場では大人たちが太極拳をしたりヤンコ踊りを踊ったり、子どもたちがその近くを走りまわって笑い声が絶えない、穏やかでしかも賑やかなところでもあった。そんな場所がいまは一日中村を歩き回ってもやっと1人に出会えるかどうかの、人影の見えない村になってしまった。学校や体育館、プール、アパート団地などには雑草が私の身長以上に生えてきて、建物がよく見えないぐらいだった。

だから、私が話を聞きたいと村の村長の家を訪ねたときに、村長は若い人が来たときとても喜んだ。村長は、現在50戸ぐらい残っている90人前後の人たちも全員が50歳以上のお年寄りで、「いまは若い人を見て死のうとしても、いないんだよ」と冗談まじりに話してくれた。村長の話によると、愉樹川は和頓村、新興村、機関村、太陽村、暗呉村の5つの村で構成されていて、1992年の統計では600戸、3,000人ぐらいの人が住んでいたという。しかし、発電所が操業停止になり、それに次ぐ韓国ブームでいまはここまで悲惨な状況になっているという。村の人口は発電所が運転を停止してから少しずつ減り始めたが、2005年になって一気に減ったという。多くの人たちが村では生活できないと

判断したためだと村長は話す。そのときから、韓国に行ける人たちは韓国に行き、韓国に行けなかった人たちは中国国内の都市部へと出て行ったという。しかし、2007年に韓国政府が「訪問就業制度」を公布するや否や、中国の都市部に出て行った多くの人たちも韓国語の能力試験を受け、近いうちに韓国に行けるかもしれないとパスポートの申請や更新に村を訪れたという。村長は、その人たちの多くが現在韓国にいと話してくれた。村を離れた多くの農民たちが土地を残したまま外へ出て行ったため、親戚や知人を通じて土地のことを尋ねてくる人が多く、村長は一部の人たちの行き先については把握している様子だった。村の村長も元々は3年ごとに交替するのがルールだったが、いまの村長はすでに5年目だという。また、昔は村長というのは40代の若い人がするのが一般的だったが、いまは若い人がいなく、残った人のなかでわりと若い自分ができるようになったという。そう話している村長も今年58歳だという。

### 夫妻の韓国での生活

崔景晃は、2003年に産業技術研修制度で韓国に入国した。仕事内容は漁業従事とあらかじめ決まっていたので、他の職種に移ることは不法になるのと同じことだった。彼はそれまで漁業の仕事をした経験もなければ、海を見たこともなかった。でも彼は、韓国へ旅立つ前には仕事に対する不安より韓国での生活に対する期待感のほうが強かったという。韓国では釜山に近いウルサンというところにある港で漁業の仕事をするようになったが、足に怪我をして辞めることになる。その後、韓国に行った妻と一緒にソウルに移る。

《崔景晃》韓国に行く前まではずっと愉樹川で暮らしていましたので、飛行機に乗る機会はありませんでした。それで、はじめて飛行機に乗ったんですが、1回でもう嫌になるほど乗りました。なぜなら、延吉からウルサンまでは直行便がなかったの、まず、延吉から北京に行って、そこからまたソウルに行き、その後、ソウルから国内線でウルサンに行きました。なので、計3回も飛行機に乗ってやっと目的地に着きました。ソウルからウルサンに行くには国内線でしたので、インチョン空港から金浦空港に移動しないといけなかったです。そのため空港バスに乗って、バスの中からソウルの様子を見ることができました。高層ビルが建ち並び、発展している様子に感心しました。

しかし、ウルサンに着いたら、ソウルと全然違って田舎だったのでびっくりしました。仕事はウルサンにある港で船長たちが獲ってきた魚の処理をすることでしたが、生きた海の魚を触るのは生まれではじめてでしたので、最初は本当に文句ばかり言われました。働いている人は、私のほかに、ネパールからの外国人労働者1人と韓国人2人の、全部で4人でした。給料は住込みで月100万ウォンでしたが、中国で農業をして得た2年分の収入に匹敵しました。だから、文句を言われても差別されても給料のことを考えると我慢するしかなかったです。船長は言葉が少なく、何かで怒った後には必ず煙草に誘ってくれたりする優しい人でした。だから船長はよかったです。問題は一緒に働いている2人の韓国人でした。いつも偉そうに、私にあれこれやらせて自分たちは船長がいなくて煙草ばかり吸って全然働かないのです。そして、働き始めてちょうど8ヵ月ぐらいになっ

た頃、その一緒に働いていた韓国人の1人が機械の操作を間違っ、私とネパール人が足に大怪我をしました。私たちが下で魚の分別作業をしているのに、機械のスイッチを入れてしまい、私は足が機械に引きずられて、足首の骨が折れました。また、足が機械に擦られて大量の血が出ました。みんなびっくりして、急いで救急車を呼んでくれて病院に行きましたが、2人とも2週間病院に入院することになりました。しかも、ギブスをして3ヵ月は動けないと言われました。入院の費用は船長が立て替えてくれて、怪我の原因がその韓国人のミスだったので、後で彼の給料から差し引くということでした。それで入院の費用はなんとかなりましたが、入院後の生活が問題でした。世話をしてくれる人がいないと一人では何もできませんでしたから。でも、借金も全部返済していないまま、中国に帰るわけにはいきませんでしたので、船長に「妻を韓国に招待してくれ」と頼みました。船長も私の妻が来て私の介護をする以外は方法がないと判断したらしく、すぐそうしてくれると言いました。それは、本当にありがたかったです。ひどい雇い主だと、労働者が怪我をして働けなくなったら、首にすると同時に住んでいたところからも追い出して、「死んでも自分とは関係ない」とうそぶく人もいるというような話を聞きましたから、私の船長はそういう人たちに比べると本当に責任感のある人でした。私が回復するまで、働いていなくても、寮にそのまま住んでいいと言ってくれました。

《李玉蓮》私は夫が工作中に怪我をしたということを知り、気絶しそうになりました。韓国で工作中に怪我をして、障害者になって帰ってきた人たちの話をよく聞いていたからです。私は夫がまさにその噂のような人になってしまったと思ったのです。せつかく稼いだお金も全部治療費として使ってしまう、一文なしの障害者になって帰ってくるだろう、と。そういう最悪のケースを想像しました。でも幸い、夫の状態は私が心配したよりははるかによかったです。足を切断したのではなく、ギブスをはめているだけだと聞いて、安心しました。しかも、船長が私を韓国に招待してくれるという話を聞いたときには、正直うれしかったです。夫の状態を自分の目で確かめられるということ、ブローカーに手数料を払う必要もなしに韓国に行けるという2つの理由で。私は、韓国へ行って3ヵ月間、夫の介護をしました。治療費は船長が立て替えてくれていましたが、その後の生活費や薬代などは全部、夫がそれまで稼いだ給料で賄っていましたが、貯めたお金はほとんど使ってしまいました。それで、私は船長に「夫がこうなって、いままで稼いだお金を全部使ってしまったので、帰りのチケットも買えない。私が働いてお金を稼ぐか、船長が帰りの費用を出してくれるかしか方法はない」と言いました。そうしたら、「自分の招待で韓国に来たということを秘密にしさえすれば、オーバーステイをしてお金を稼いでもかまわない」と言ってくれました。

でも、その田舎ではなかなか仕事が見つかりませんでしたので、私は夫と一緒にソウルに出ることにしました。夫のビザは雇い主から解雇されない限り転職が認められない上に、転職するとしても最初の仕事が漁業だったらその次も漁業の仕事をしなさいといけないものでした。そのルールを破ったら不法になるわけです。でも、夫は「不法になってもおまえと一緒に

ソウルに行く」と言いましたので、ふたりでソウルに行きました。私たちはだれも頼る人がいない状況でソウルに出てきて、朝鮮族労働者が多いと言われていた安山というところで地下部屋を借りました。その後、私は焼肉屋に就職しました。1週間に1日休みがあって、朝8時から夜10時まで。1日12時間働きました。最初の1週間ぐらいは本当に大変でした。しかも、働いている人たちが全員韓国人でその職場の空気が読めず、つかかったです。私になにか言うとみんなが笑っているような気がして、話もなかなかできませんでした。仕事も最初は肉を焼いた後の鉄板を洗ったり、塊(かたまり)の肉を焼肉用に切ったり、野菜を洗ったりなどと、一番汚い力仕事ばかりやらされました。それが3ヵ月6ヵ月と時間が経つにつれてだんだんよくなってきました。働いている人たちと普通に話ができ、仕事も少し楽なほうへと変わりました。

夫はソウルに来てからも6ヵ月ぐらいは仕事をしませんでした。その後、私が働いている焼肉屋で炭火をおこす人を募集しましたので、私が夫を紹介してふたりで同じ焼肉屋で働くようになりました。夫は火をおこす以外にも、鉄板を洗ったり、店長と一緒に仕込みをしたりなどと、店の力仕事は全部しました。でも、同じところで働くようになって生活のリズムが一緒になり、夫婦間の会話も増えました。だから私は、夫が仕事に対して文句を言うたびに、辞めないように宥めました。それで、中国に戻るまでふたりでずっとその焼肉屋で働きました。

最初は職場の同僚の人たちが仲間に入れてくれなかったり、力仕事ばかりさせられたりして大変でしたが、時間が経つにつれてよくなりました。1年ぐらいたら、みんな仲良くしてくれましたし、社長もいろいろと気を配ってくれました。帰る頃にはみんな「別れるのは寂しい」と言って、わざわざ送別会もしてくれました。

私は韓国の永住権を取るつもりで、2006年に盧武鉉政府の不法同胞自主帰国プログラム<sup>7</sup>を利用して中国に半年帰国しました。その後韓国に戻って正規の就業ビザをもらいました。私の知り合いは、「半年も中国に帰国していたら、いまの仕事がなくなるだろうから、不法であろうとも中国には帰らない」と言って、不法のまま働き続けました。でも、うちの社長は「そういう制度があるなら、ぜひ利用して合法になりなさい。帰ってきたら、また、ここの仕事に戻してあげます」と言ってくれましたので、私は安心して中国に帰って、息子のところに半年いました。夫も一緒に帰国すればよかったです。夫は「あと2年ぐらいいて中国に帰るから、不法のままでもいい」と言って帰らなかったです。私も2人のうち1人が永住権を取ればいいと思って、1人で帰りました。そうして私がせっかく合法ビザをもらったのに、夫が体調を崩してしまい、2009年にはふたりで中国に帰ることになりました。

<sup>7</sup> 2006年盧武鉉政府は、不法滞在同胞の問題を解決するために第2次「同胞帰国支援プログラム」を実施して、政府が決めた期間内に自主申告をして、自国に帰国した者に対して再び韓国に入国できる権利と、韓国国内に必要な手続きを経て合法の雇用許可ビザを付与する制度を設けた。この制度によって、約6万人の中国同胞が合法になったという。

韓国での生活は家と仕事を往復する毎日で、特にいい思い出も辛い思い出もなかったです。毎日仕事また仕事でした。1週間に1日休みはあったんですが、その日は家で洗濯したり掃除をしたりすると一日が終わってしまうので、外出する時間はなかったです。それに、人間関係といっても、働いているときは焼肉屋で働いている人たちがすべてで、家に帰ったら夫と2人だけの世界です。愉樹川にいるときには村の人や発電所の人などと人間関係が広がったです。でも、韓国では近所付き合いがなにもないから、夫婦の仲は中国にいるときに比べて、よかったと思います（笑）。他に人間関係がなかったから、お互いが一番の頼りでした。

### 北京での生活／再度の渡韓を考える

夫妻は、2011年に、北京で働いている娘のために北京郊外に70平米の物件を総価格90万円（1,400万円）で購入した。30万円の頭金を先に支払い、残りの60万円は外資系企業に勤めている娘が銀行からの住宅融資で賄った。返済期間は20年で月々の返済が3,000元となっている。そのため、中国に帰ったら優雅な生活を送ろうと考えていた夫妻の思惑は、まったく正反対の状況になってしまった。

《李玉蓮》中国に戻ってから最初は延吉にアパートを買おうと思いましたが、1平米4,000～5,000元（6～8万円）もしたんです。びっくりしました。それに娘が「延辺で30～40万円払ってアパートを購入するより、北京で30万円の頭金を払って後はローンを組んだほうが将来的に儲かる」と私たちを説得しました。娘は毎月の給料から住宅資金としていくらか天引きされているそうですが、それは住宅を買うときじゃないと使えないため、北京で家を買ったほうがいいと思ったのかもしれない。私たちも延吉でアパートを買っても、私たちが死んだ後は自然と娘のものになるように娘の名義で買おうと思っていましたので、娘が北京で買いたいならそれでもいいと思ったわけです。息子には結婚するときにある程度の金銭的援助をしてあげましたので、娘にも何かしてあげたいと思って……。韓国に行って7年間も子どもたちと離れ離れで生活していたため、これからは北京で娘と一緒に生活するのも悪くないなと思ったのです。

でも、現状では、私がもう一回韓国に行かないといけなさそうです。娘は外資系企業に勤めていて、月給が6,000元（9万円）で、同世代のなかでは高給取りだと思います。だから、本来は優雅な生活ができるはずですが、いまの生活ぶりは優雅とはほど遠いものになっています。その原因がこの家のローンです。70平米のこのアパートを90万円で買いましたが、30万円の頭金だけを私たちが払いました。残りはローンを組んで娘が毎月3,000元ずつ返済しています。6,000元の給料から半分を返済に充てると、残りは3,000元です。そして、電気、水道、ガス、さらに交通費、通信費などを払うと1,000元は消えてしまいます。次は食費ですが、私たち夫婦は一日三餐を家で食べていますが、娘はお昼は外食するしかありません。以前は夕飯も同僚たちと外で食べていたそうですが、いまはできるだけ家で食べるようにしています。でも、北京の物価は高い。食材にかかる費用もバカにならないです。結局、どう遣り繰りしても食費は1,200元以上か

かります。そうすると、毎月娘の手元に残る小遣いは、わずか 500～600 元ぐらいしかありません。だから、夫はどこか痛くても痛いと言えないです。私たち夫婦はいま医療保険も何もないから、北京で病気になったらいくらかかるか想像できません。私は北京で働こうとしても、言葉もあまり通じないし、給料も少ない上に適した仕事が見つかるとは思えません。私の韓国での給料はいまの娘の給料より多かったです。でも北京でしたら、せいぜい 2,000～3,000 元ぐらいでしょう。中国は発展しているとはいっても、韓国に比べるとまだまだだと思えます。

娘は本当にこのアパートを購入してから生活が大きく変わりました。友達や同僚との会食はできるだけ避け、好きだった国内旅行も完全に止めました。買い物をするのにも、スーパーが割引セールやバーゲンをやるときだけを狙います。毎日遣り繰りして生活していますが、何よりも心配なのが会社を首になったらどうしようということです。そのため熱が出て会社を休めませんし、ローンを払うようになってからは、上司の顔をいちいち気にするようになったと言っています。戦々恐々の毎日ですね。大病にでもなればおしまいです。このような生活が 20 年も続くのかと思ったら、私はやっぱり北京でアパートを買ったのは失敗だったなと思えます。でも、いまさらどうしようもないし、私がもう一回韓国に行って、少しでも娘の負担を減らしてあげるしかないと思えます。

## **Korean-Chinese Baffled by the Drastic Social Change: An Interview with a Farmer Husband and Wife Having an Experience to Migrate to South Korea**

JIN Yin-shi

Korean-Chinese was certified as an ethnic minority by the People's Republic of China (China) in 1949. However, they had few exchanges with South Korea for 43 years because of the conflict between China and South Korea over political and ideological matters. Meanwhile, South Korea had developed economically and the world became aware of its growth when it hosted the Asian Games in 1986 and the Seoul Olympics in 1988. The Korean-Chinese first recognized South Korea as an economic power by watching these events on television. After China had established diplomatic relations with South Korea in 1992, many of the Korean-Chinese flooded to South Korea with dreams of success. The emigration flow will continue for the time being because the income gap between urban and local residents is still large in China.

Cui Jing-huang and Li Yu-lian (both pseudonyms), a Korean-Chinese husband and wife, the interviewees in this study, were born in China

and witnessed the nation's most formative historical events. Originally, their grandparents crossed over from the northern Korean peninsula (presently the Democratic People's Republic of Korea) to northeastern China. Cui, who had encountered the Cultural Revolution at the age of 17, lost the opportunity to receive higher education. When the revolution ended in 1976, he helped his parents on their farm and continued to do so after his marriage with Li. Later, they started a business producing tofu for the employees working in a power plant built in their village in 1979 and became well off.

They, however, lost their source of income when the plant shut down in 2001. As a result, the husband and wife decided to migrate to South Korea on trainee visas to earn their living. Although Cui injured his leg in an accident at work, they had worked there for 6 years and went back to China with enough money to buy a house in the Korean Autonomous Prefecture in Jilin Province. But instead of leading a desired life in Jilin, they purchased a luxurious apartment in Beijing after accepting advice from their daughter who expected a capital gain in the future. However, the family lapsed into difficult times, shouldering the heavy burden of a mortgage loan, which now has become a social problem in China called "mortgage slave". It can be said that Cui and Li tried desperately to adapt themselves to the rapid change in the Chinese society, but were swayed in turn.

This life-history interview highlighting the strengths and weaknesses of the Korean-Chinese, the desire to move to another country, and the hardships they faced when struggling to adapt to environmental changes, clearly brings to light the reality of the ethnic minority.

**Key words:** Korean-Chinese, international labor migration, migrant work